

きみと創る物語の楽しさ

紙しばい文化の会「かみなり一座」



手作り紙芝居の上演を楽しむ子どもたち(10月6日)

お話を創る楽しさ
お話を絵にする楽しさ
お話の人物を演じる楽しさ
子どもたちの笑顔を見る喜び

今回は、手作り紙芝居の創作や上演を通して、紙芝居の文化を広めるため試行錯誤しながら活動している市民グループ「紙しばい文化の会」と、箕面手作り紙芝居コンクールで受賞した高本豊美さんと金井三加子さんを取材しました。

絵と語りが魅力 紙芝居の文化をつなぐ

7月に開催された第29回箕面手作り紙芝居コンクール(大阪府)で「紙しばい文化の会」がみなり一座から挑戦した、高本豊美さんの「ドアをあけると」が優秀賞、金井三加子さんの「けんたのぼうけん」が大阪国際児童文学振興財団賞を受賞しました。

「紙しばい文化の会」は、市内在住の児童文学作家、今関信子さん指導による紙芝居講座の受講生有志を中心に、昨年6月に発足しました。30歳代から60歳代まで約15人のメンバーが手作

り紙芝居の創作をしています。発起人の一人の林田博恵さんは手作り紙芝居歴約20年。幼稚園の園長先生をしていたころから、何かを教えたり、コミュニケーションを取るために、絵と語りで子どもを引き付ける手作り紙芝居はとて有効でした。定年後に楽しさを再認識。手作り紙芝居の創作を楽しむとともに「紙芝居の文化を子どもに文化運動につなげたい」と考えるようになっていきました。

物語絵、語り、演技 ゼロから創る苦労と楽しさ

手作り紙芝居はある意味総合芸術です。コンクールで入賞し

た金井さんは絵を描くのは好きだけとお話を創るのは難しいと話します。高本さんは絵を描くのもお話を創るのも好きだけれど演じるのは難しいと話します。講座をきっかけに仲間に入った代表の八段「恵さんは人形劇のグループで経験を積んだので、創作に苦戦しながらも、楽しんで演じています。」

それぞれ個性はありますが、物語を作り、場面を絵にして、演じる大変さは同じ。創作に1年くらい掛かる事もあるそうです。それでも「ゼロからものを創るって凄いです。制作に集中していると忙しい日常の事など忘れてしまふし、苦労をしても苦痛になりません」とメンバーら

は笑顔を見せていました。

手作り紙芝居コンクール 作り手から演じ手に成長

心と愛情をこめ、時間をかけて作った紙芝居でコンクールに挑んだ高本さんと金井さんは、作品審査をクリアして箕面市へエントリーしている皆の真剣度々に圧倒されながら、審査員の前で手作り紙芝居を上演。審査員から紙芝居の絵や演じ方、お話などのダメ出しを受けて手を加え、最終審査では会場を埋める観客の前で上演しました。

受賞した高本さんと金井さんは皆さん凄く上手に演じていたので、発表された時は信じられま

せんでした。ダメ出しされたところを直しながら、手作り紙芝居の作り手から演じ手に成長して、観客の反応を受け取り、はじめて「自分の作品にできたのかなと思います」と話していました。

アナログだから心伝わる 子どもと創る物語の世界

市立図書館で毎月1回開かれる勉強会は、今関さんを講師に紙芝居の創作講習と実演をしています。開演時間が近づくと、活動室に親子連れや子どもたちが集まってきました。

紙芝居はゲームやテレビとは違つアナログなエンターテインメントです。だからこそ演じる人と観る人が一緒に想像しながら物語の世界を創っていくことができるという魅力があります。そのうえ、手作り紙芝居が演じるのは世界に一つだけの物語。作り手の伝えたいメッセージが、我が子や両手を広げた舞台の前に集まってくる子どもたちに、温かい絵と言葉で染み込んでいくのです。



コンクールで優秀賞の高本豊美さんと作品



コンクールで特別賞の金井三加子さんと作品



左から八段代表、金井さん、高本さん、林田さん



今関信子さんを講師に開かれる創作講習会

※12月1日(日)、市立図書館で「今日は紙しばいを初開催します。詳しくは25頁をご覧ください。」